



Title	日本語・日本文化 第36号 奥付
Author(s)	
Citation	日本語・日本文化. 2010, 36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/22011">https://hdl.handle.net/11094/22011</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

---

## 執筆者紹介

---

嶋本 隆光	本センター教授
柴田 芳成	本センター准教授
阪上 彩子	本センター非常勤講師
古川由理子	本センター非常勤講師

---

## 編集後記

---

今号には、三本の研究論文と、一本の研究ノートが集まった。嶋本論文は、近代の思想家大川周明の著作、主に『復興亜細亜の諸問題』と『亜細亜建設者』のペルシアに関する記述の検討を通じて、彼の一貫した反英的立場を指摘する。その一方で、宗教倫理思想については、彼の他の著作との一貫性が見られないことを明らかにしたものである。柴田論文は、古典文学に描かれるカメの姿について論じたもので、近世になって古代・中世には見られなかった新しいカメの姿が描かれるようになることを指摘し、都市における社会・文化との関連を浮き彫りにする。阪上論文は、日本語学習者の話し言葉における不適切な指示詞の使用が、どのような原因に起因するものなのか、そして適切な指示詞の使用のためにはどのような指導が望ましいのか、考察したものである。省略や繰り返しなどにも目配りした、堅実な研究といえる。古川研究ノートは、一見「ほめ」に見える表現が、実際には嫌み・皮肉に転換することがあるという現象に着目し、どのような場合にその転換が起こるか考察したものである。研究ノートというカテゴリではあるが、筆者はこれまで教育現場における「ほめ」についての研究を蓄積してきており、今後、その視点からの独自の発展が期待される。

前二者の論考は日本の文化に関するものであり、後二者は日本語に関するものである。しかし言うまでもなく、言語と文化は切っても切り離せない、表裏一体の関係を持つもの

である。本号の研究はいずれもその認識が踏まえられていたが、今後も、文化の面を鋭く見据える言語研究、そして言語の面に確固とした立脚点を持つ文化研究を、編集子として期待したい。

---

## 『日本語・日本文化』投稿規定

---

1. 資格：本センターまたは関係機関所属教員（非常勤を含む）及び『日本語・日本文化』編集委員会において適当と認められた者。
  2. 内容：日本語・日本文化等に関する未発表の研究論文・研究ノート・研究報告等。
  3. 体裁：研究論文は400字詰原稿用紙50枚前後（欧文はA4ダブルスペース30枚前後）、研究ノート・研究報告は25枚前後（欧文は15枚前後）。
  4. 要旨：本文と文の場合、欧文による要旨（A4ダブルスペース1枚）を、欧文の場合は、和文による要旨（800字程度）を添付。
  5. 採否：原稿の採否は『日本語・日本文化』編集委員会が決定する。
- 

## 編集委員

---

角道 正佳    嶋本 隆光    薦 清行

## 日本語・日本文化 第36号

2010年3月31日 発行

編集 大阪大学  
発行 日本語日本文化教育センター  
〒562-8558  
箕面市栗生間谷東8-1-1  
電話 (072)730-5459  
FAX (072)730-5074  
印刷 中西印刷株式会社